社会問題対応策における分離と共生についての研究

近畿大学理工学部　学生員　○高木　智史
近畿大学理工学部　正会員　　久　隆浩

1．はじめに

近年、女性専用車両の設置や分煙化など、分離によって社会問題の解決を図ろうとする傾向が強まっている。近代はこうした分離による問題解決を進めてきた時代ともいえる。都市計画でもゾーニングという発想は分離を指向するものである。一方で、共生を前提とした問題解決の方策もある。こうした分離と共生について、私たちの意識はどのようになっているのか、をあきらかにすることが本研究の目的である。さまざまな社会問題への対応について、分離と共生、どちらを指向するのか、人々の意識をアンケート調査によってあきらかにした。

アンケート調査では、25 の社会問題や社会の状況について「分離」か「共生」いずれを選択するかを二者択一で尋ねた。アンケートは平成 15 年 12 月に近畿大学生とその家族に対して 500 部配布し、177 部を回収した。

2．数量化３類による意識構造の分析

得られた回答を、数量化３類を用いて分析した。数量化３類によって得られた第１軸・第２軸について、軸の名前の決定に大きな影響を与える、絶対値の大きいカテゴリスコアを抜粋して表１・表２に示す。

表１より、第１軸では正の方向に「駅の構内を禁煙にすることに反対」・「大学構内を禁煙にすることに反対」・「ゴミ処理場の建設に賛成」など共生の傾向を示す回答が集まっており、負の方向に「障害者施設の建設に反対」・「ホテルの禁煙に賛成」・「新聞配達所の建設に反対」などの分離の傾向を示す回答が集まっている。このことから第１軸は「共生－分離」の軸であると解釈できる。また表２より、第２軸では正の方向に「コンビニの建設に反対」・「消防署の建設に反対」など土地利用面で分離を示す項目と「レストランの禁煙に反対」・「駅構内の禁煙に反対」など施設利用面で共生を示す項目が存在する。負の方向には「道路の建設

表1　カテゴリー数量（第1軸）

カテゴリ名	第1軸
障害者施設の建設に反対	-1.6399
ホテルの禁煙に賛成	-1.5698
歩車分離に反対	-1.4801
新聞配達所の建設に反対	-1.3379
レストランの禁煙に賛成	-1.3211
大学構内の禁煙に賛成	-1.3055
駅構内の禁煙に賛成	-1.2825
消防署の建設に反対	-1.1623
郊外の集合住宅団地に生まれ育った	-1.0598
コンビニの建設に反対	-1.0303
⋮	⋮
新聞配達所の建設に賛成	1.0907
農山漁村に生まれ育った	1.2329
携帯電話禁止車両の導入に反対	1.3695
道路の建設に賛成	2.1550
ホテルの禁煙に反対	2.4634
ゴミ処理場の建設に賛成	2.4860
レストランの禁煙に反対	3.0048
大学構内の禁煙に反対	3.3331
男子校・女子校に通いたい	3.5101
駅構内の禁煙に反対	3.6983

表2　カテゴリー数量（第2軸）

カテゴリ名	第2軸
道路の建設に賛成	-3.5544
ゴミ処理場の建設に賛成	-3.2677
自分以外の特定の人だけが利用できる食堂スペース設置に賛成	-2.7201
消防署の建設に賛成	-1.6131
自分も含め特定の人だけが利用できる食堂スペース設置に賛成	-1.6128
新聞配達所の建設に賛成	-1.2865
コンビニの建設に賛成	-1.1333
ホテルの禁煙に賛成	-1.0623
店や事務所などいろいろな施設が混じったまちに暮らしたい	-1.0411
レストランの禁煙に賛成	-0.8910
⋮	⋮
隣に学校があることに反対	1.2312
大学構内の禁煙に反対	1.4475
歩車分離に反対	1.5346
新聞配達所の建設に反対	1.5781
ホテルの禁煙に反対	1.6670
障害者施設の建設に反対	1.7100
駅構内の禁煙に反対	1.8594
消防署の建設に反対	1.8855
レストランの禁煙に反対	2.0265
コンビニの建設に反対	2.5778

Satoshi TAKAGI，Takahiro HISA

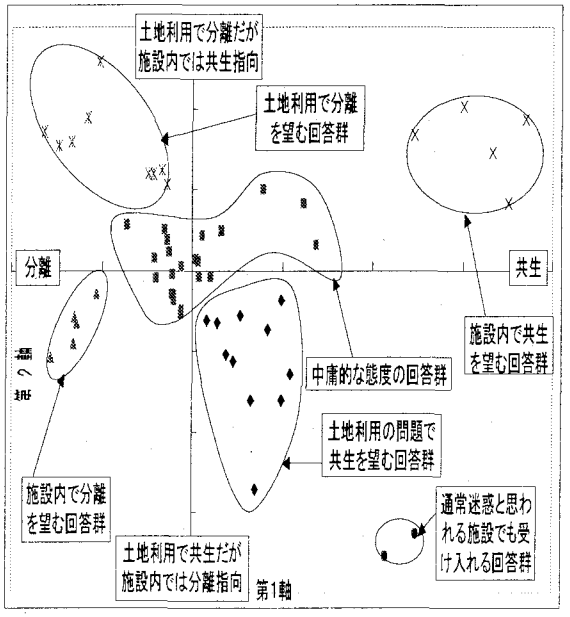

図１　カテゴリスコアの散布図とカテゴリーの分類

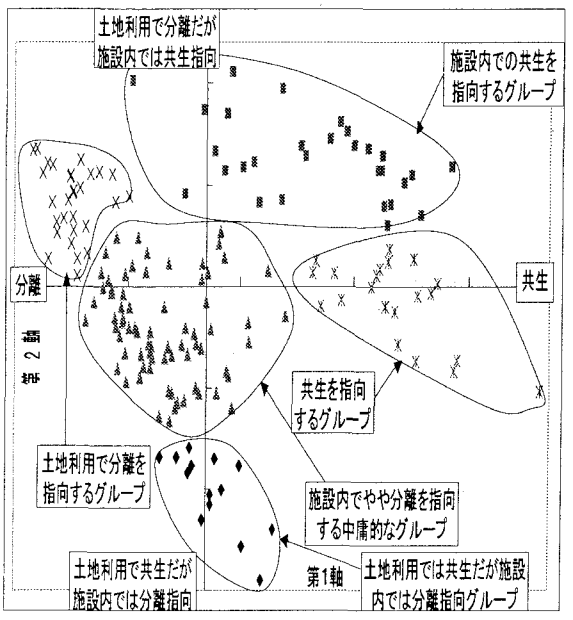

図２　サンプルスコアの散布図と回答者の分類

に賛成」・「ゴミ処理場の建設に賛成」などの土地利用面で共生を示す項目と「特定の人だけが利用できる食堂スペースに賛成」・「ホテルの禁煙に賛成」などの施設内で分離を示す項目が存在する。このことから第２軸は「土地利用面と施設利用面からみる分離と共生」の軸であると解釈できる。

カテゴリスコアをデータとしてクラスター分析を用いてカテゴリの分類を行ったところ、図１に示す通り６つのクラスターに分類できた。クラスター１は「土地利用で共生を望む回答群」、クラスター２は「中庸的な態度の回答群」、クラスター３は「施設内で分離を望む回答群」、クラスター４は「施設内で共生を望む回答群」、クラスター５は「土地利用で分離を望む回答群」、クラスター６は「通常迷惑施設と思われる施設でも受け入れる回答群」である。

また、カテゴリスコアと同様に、サンプルスコアについてクラスター分析を用いて被験者の分類を行ったところ、図２に示す通り５つのクラスターに分類できた。クラスター１は「土地利用で共生だが施設内では分離指向のグループ」(14 人)、クラスター２は「施設内での共生を指向するグループ」(29 人)、クラスター３は「施設内でやや分離を指向する中庸的なグループ」(74 人)、クラスター４は「土地利用で分離を指向するグループ」(29 人)、クラスター５は「共生を指向するグループ」(21 人)であった。

３．まとめ

今回の研究から、様々な社会問題・社会状況に対する意識として「共生」と「分離」それぞれの傾向があることがわかった。また、土地利用に関する分離－共生意識と施設内利用に関する分離－共生意識には異なった傾向があることがあきらかとなった。人々の意識は土地利用面と施設利用面で違った特徴があるといえる。

都市計画の観点からより詳細に分析すると、「近所に店などがある下町に生まれ育った」という回答が「土地利用で共生を望む回答群」に含まれており、下町に生まれ育つ人は土地利用で共生指向が強いといえる。また、サンプルスコアによる回答者の分類では「共生を指向するグループ」が 21 人となっており、約 1 割の人が共生指向であることがわかる。一方、「土地利用で分離を指向するグループ」が 29 人、全体の 16%存在することがあきらかとなった。

E.ハワードの田園都市論以降、近代都市計画では分離によって問題解決を図ってきたが、近年ヨーロッパを中心に mixed use の視点で都心部の再活性化を図る傾向が強まってきた。こうした動きも踏まえながら、分離と共生の問題を今後も考察していく必要がある。